『ラスト 24 時間』
ウダ・タマキ
4,804 字

あらすじ
　末期がんで余命宣告を受けた拓也。ある日、病院で寝たきり状態で過ごしている拓也のもとへ女性が現れた。彼女が提案する内容は、健康な体を与えてくれる代わりに寿命が二十四時間になるというものだった。このまま寝て過ごす余生より、二十四時間の自由を選んだ拓也を待っていた運命とは？

　無機質な天井に向けて、拓也は大きなため息を吐き出した。西側の窓から見える空が赤く染まり、今日という日の終わりが近いことを知る。
　あと何回、陽が沈むのを数えるのだろう。一日中ベッドに横たわり、点滴の管につながれた体は自由を失った。
「あぁ腰いてぇぇ」
　いや、もうどこが痛いかさえわからないくらい体中至るところが痛み、ろくに口から飯を食えないくせに、一丁前に小便と大便はオムツに垂れ流す。
　まるでじじいだよ。三十二歳にして、じじいだ。俺が、俺という一人の人として、生きる意味はなんだ？　生きている価値はあるのか？
　そんなことを考える日々。
「誰か教えてくれよ」
　拓也は天井に向けてそう呟いたが、虚しく静寂に吸い込まれるだけだった。

「余命三ヶ月ですね」

　今から二ヶ月前。主治医の発した言葉が拓也の頭の中でリピートする。淀みのない口調は、鋭利な刃物となって彼の心をえぐった。そして始まった死へのカウントダウン。三ヶ月、二ヶ月……もうそろそろ、ラスト四十日くらいか。
「岸谷さぁん、就寝前のオムツ交換しますね」
　好きにしてくれ。若い看護師だろうが、もう羞恥心すら失った。
「では失礼しますね……うっ」
　「うっ」て、臭そうな顔したよな？　一瞬、眉間にシワを寄せたよな？
　恥ずかしさなんてない。ただ、情けない。惨めで仕方ない。

　俺なんて、死んでしまえよ――

　いつの間にか眠っていた。いつからか拓也の生活に規則正しいリズムはなくなった。眠くなれば眠り、目が覚めれば起きるだけ。外はすっかりと暗くなっていた。なんとなく、いつもと違う空気を感じた。ひょっとして死んでしまったのか？　それとも夢を見ているのか？　不思議な感覚だった。
「ねぇ」
「ん？」
　暗闇に聞こえる女性の声。緩慢な動きで室内を見渡すが誰もいない。ついに頭までイカれたか。
「死を間近に迎えた気持ちはどう？」
「誰だ」
「不思議なもんね。死は人間にとって最も普遍的なのに、いざ目の前に迫ると怖くてたまらないんだから」
　姿は見えない。が、拓也は近くに気配を感じていた。
「どう？　このまま残された人生を過ごす気分は」
「嫌に決まってんだろ」
「それはそうね」
「なんだよ、あんたは。とっとと消えろよ」
　もしかして死がすぐそこに迫り、このまま目覚めないのだろうか。
「この提案はどう？」
「提案？」
「あなたに元気な体をあげる」
「はっ、くだらない。今さらそんなことできるわけねーだろ」
「信じないなら、私はこのまま消えるだけよ」
「うっせぇな。だから早く消えろって言ってんだろ」
「そっか。残念だけど、あなたが望むなら仕方ないわね」
　そう言い残して女性は消えた。いや、そもそも見えていたわけではないが、明らかに気配が消えた。
「あほくさ」
　と思いながらも、もし本当に自由な体を取り戻せたら……そんなことを考える夜はいつもより長い。かつて夜型人間だった拓也は、今は夜を嫌う。ろくなことを考えないからだ。早く朝が来てほしいと願うが、それは着実に死へと向かっていることを意味する。生きていたいが、目覚めに現実を知る絶望感は耐え難い。そんなジレンマ。
「なぁ」

深閑とした病室では、拓也の声がこだましそうだった。
「なぁって。さっきの人か死神か知らねぇけど、もう一度出てきてくれよ」
するとどうだ。スッと誰かの気配を感じた。
「どうしたの？」
同じ女性の声がした。
「なぁ、この体をなんとかしてくれよ。嘘か誠か知らねぇけど、どうせ騙されたところで先のない命だ。あんたを信じるよ」
「いいでしょう。だけど、条件がある。ずっと元気でいられる訳じゃないの。二十四時間だけ。健康でいられるのは二十四時間に限られているのよ」
「その後はまた寝たきりってか？」
「いえ。命が尽きるの」
「死ぬってことか？」
「そう」
このままの状態で生き続けたいとは思わない。しかし、意図して死期を早めるには勇気がいった。
「やめておく？」
拓也は目を閉じた。
「灯火消えんとして光を増すだ。わかった。自由に動ける二十四時間をくれ」
「ちょうど日付が変わる時間。頃合いね。では、今日という時間を有意義に過ごしてね。きっと素晴らしい一日になるわ」
そう言い残して女性は消えた。
拓也は枕元に金色の懐中時計が残されていることに気付いた。見慣れた時計とは違い、一から二十四までの数字が記されている。女性の話が事実なら、この時計が一周まわる頃、拓也の命は尽きる。にわかに信じられなかったが、全身の痛みは消え、息苦しさを感じない。重く怠かった体は軽い。あぁ、空腹を感じる。
拓也は鼻に付けたチューブを外し、左前腕に挿さる針を抜いた。
ベッドから立ち上がるが、何一つとして苦痛はない。ジャンプ、スクワット、シャドウボクシング――
「マジか」
本当に自由な体を取り戻した。
「よっしゃぁぁ」
何をする？　時間は限られている。とはいえ深夜だ。よし、ラーメンを食いに行こう。拓也は病室を飛び出した。

国道沿いの「あじいち」は、拓也が子どもの頃から通うラーメン屋で、濃厚な豚骨醤油のスープが評判の店だ。
厨房を囲むL字型のカウンターと、六人がけの座敷テーブル席が四卓。壁に貼られた変色したメニュー表が味わい深い。
「らっしゃい」
拓也は壁際のカウンター席に着いた。
「チャーシュー麺お願いします」
「あいよ」
無口で頑固そうで強面な初老の店主は、相変わらず愛想がない。二十年以上通っているが、挨拶以外の言葉を交わしたことはない。
「はい、おまち」
湯気とともに立ち上るスープの香りが食欲をそそる。
ズズズッ
「うん、うまい」
ずっと変わらない味。店の雰囲気も変わらない。振り返った座敷に、家族で訪れた記憶が甦る。拓也の父もまた寡黙な男だった。無駄なことは口にしない。冗談を言うところなんて見たことがない。
銀行に勤めた厳格な父と、芸人を目指した拓也。2人の間には、いつからか確執が生じた。少しずつ開いた距離の間には、いつしか深い溝ができていた。
芸人の夢は諦めた。いや、散った。父が正しかったと今になって思う。謝るにも、もう手遅れだ。あれから何年も連絡を取っていない。
「ごちそうさま。おいしかったです」
「まいどあり」
黄ばんだ白い壁に掛かる時計が、ちょうど一時を示す。店主が静かにコック帽を調理台に置いて、大きく息を吐き出した。
「にいちゃん、子どもの頃からよく来てくれてたよな」
店主が覚えていたことは意外だった。
「え、はい」
「あんたが最後の客だ。ありがとな」
「最後？」
「今日で店を閉めるんだ。俺ももう歳だからな」
「そんな……」
あまりにも静かで、突然の幕切れだった。しかし、引き際が店主らしい。
「四十年だ。我ながらよく頑張ったよ」
店主はポケットから取り出した煙草を口にくわえた。紫煙が換気扇に吸い込

まれていく。
「まだ、頑張れるんじゃないですか」
「形あるものは、いつか終わりを迎えるんだよ。遅かれ早かれな」
　その言葉を拓也は重く受け止めた。
「そうですよね……この世に終わらないものはないですよね」
「父ちゃん、元気か？」
「え？」
「あんたの父ちゃんは、この店に初めて来てくれたお客なんだ」
「マジで……」
　いつの日か、幼い拓也に向けた父の言葉を思い出した。

　父さんはこの店の最初の客なんだぞ――

「子どもが生まれるって、嬉しそうに話してたよ。母ちゃんが病気で死んだときは、珍しくビール飲みながら、一人息子をちゃんと育てられるだろうかって。そうそう。一人で来ると、いつもその席に座ってたもんだよ」
　拓也は下唇を噛みしめた。
「最近、ツラ見せないから気になってな」
　最後に父と一緒に来たのはいつだろうか。拓也の記憶では、二十歳の誕生日を迎えてしばらくした頃、カウンターで瓶ビールを飲んだのが最後。恥ずかしながら二人で乾杯した。照れ臭そうで、嬉しそうな父の顔を思い出した。
「すみませんおやっさん、もう少しだけ。あと少しだけでいいから、店を開けててください」
　拓也は店主の返事を待たず、お金だけを置いて店を出た。
　近くの公園のブランコに座る拓也。今宵は満月だった。ポケットから取り出した懐中時計の針は二時に近付いている。こんな深夜に数年ぶりの連絡を申し訳ないと思いながら、せめて最後にと意を決した。
　呼び出し音が鳴るたび、心臓がドキリと打つ。十一回目のコールでようやく繋がった。
「俺、だけど……」
「どうした？」
「ごめん。こんな時間に」
「久しぶりだな。何かあったか？」
　深夜だからと咎める様子はない。数年という時間の間隔を感じさせない父の口調だった。

「いや、その、長いこと連絡せず、ごめん」
「ああ。で、なんだ」
「あの、これ、最後のお願いなんだけど」
「最後？」
「実は、俺さ末期がんで余命がもう残されてないんだよ」
　まさか、余命一日とは言えなかった。
「だから……今からあじいちに来てくれないかな？」
「わかった」
　やはり口数が少ない男だった。詳しいことは訊かず、ただその一言だけだった。
　カウンター席で待つ拓也は緊張していた。ただ感情に任せて動いたが、会って何を話せば良いのか困惑している。
　ガラガラと音を立て戸が開いた。
「らっしゃい」
　振り返ると父の姿があった。頭髪には白髪が増え、額は広くなった。少し痩せたようにも見える。数年の月日をその容姿が物語っていた。
　父は何も言わず壁際のカウンター席に座った。
「久しぶりで。何にしましょ？」
「ラーメンお願い」
「あいよ」
「あ、あと瓶ビールも」
「グラスは？」
「二つお願い」
　一本の瓶ビールと二つのグラスがカウンターに置かれた。
「おい」
　右手に持った瓶を拓也の方へ傾ける父。拓也が手にしたグラスが黄金色で満たされた。今度は拓也が父のグラスに注いだ。
「再会に、乾杯」
　そう言って父が掲げたグラスに、拓也は自分のグラスをあてた。
「がんっていうのは本当か？」
「ああ」
　父は黙ってビールを飲み干した。
「親にその報告がなかったのは、悲しい話だな」
「ごめん」
「会えて、良かった」

「俺も」
「あい、おまち」
「相変わらずうまそうだな」
　ラーメンの湯気に父の眼鏡が曇る。父は眼鏡を外し「いただきます」と手を合わせて、ラーメンをすすった。
「夜中に食べるラーメンは格別だな」
　久しぶりに見る父の笑顔だった。
「実はな、昨日、母さんが夢に出てきたんだ」
「どんな夢だよ？」
「それが不思議なんだ。母さん、お前のことを話してた。そんな夢、これまでに見たことないんだがな」
「俺のことって、なんて言ってた？」
「お前の命が危ないから、早く会いなさいって」
「予知夢ってやつか」
　父がラーメンをすすり、レンゲにすくったスープを口に含んだ。
「幼いお前を残して先立つ母さんは、遺言を残したんだ。私が生きられなかった時間をこの子に託したいってな」
　拓也が二歳の頃だ。一緒に聞いたのだろうが、もちろん記憶にない。
　しかし……
「二人、仲良くね」
　そう言った母が、父と小さな拓也の手を握りしめた場面だけは、朧げに覚えている。
「ちょうど、今頃の季節じゃなかったかい？　母ちゃんが亡くなったのは」
　店主が小気味良い音を立て、ネギを刻みながら言った。
「九月二十八日二時四十五分。あの日も満月だったな」
　父はジャケットの内ポケットから何かを取り出すと、それをカウンターに置いた。
「母さんの形見だ」
　金色の懐中時計だった。
「あれ、それは」
　確かにズボンのポケットに入れたはずの懐中時計がない。
「この時計、不思議なんだ。母さんが息を引き取った瞬間、ぴたりと止まってしまった」
　懐中時計が示すのは二時四十五分だった。拓也は掛け時計に目をやった。
「二時四十五分……九月二十八日ってことは今日だ」

「ちょうど三十年前の今日、この時間、母さんは亡くなった」
父の目尻に光るものが見えた。
「また、二人で来てちょうだいな。俺ももう少し頑張って店を続けるからさ」
「ありがとう大将。また来るよ。なっ」
「あ、あぁ」
「よし。この時計はお前が持っておいてくれ」
あの女性の声は、もしかして――
拓也は止まった懐中時計を強く握りしめ、胸にあてた。